

## § 7 心身問題 (その2)

0 心身問題とは何か。

1 二元論 (Dualism) : 物心二元論

2 一元論 (Monism) : 観念論、唯物論、中性的一元論

3 物理主義に対するハードプロブレム : クオリアの存在

(1) クオリアとは何か (「クオリア」 wikipedia)

(2) クオリアが存在するなら、物理主義は間違いだ

----- (ここまで前回)

(3) クオリアは存在するのか

\* コンピュータはクオリアをもたないのか？

サールは、コンピュータが人間と同じように語ったとしても、それはクオリアを持たない、と考えて、思考実験「中国語の部屋」でそれを示そうとした。しかし、中国語の部屋の思考実験には、十分な説得力があるとは思えない。

クオリアについて通常の人間と同じように語るコンピュータが登場した時には、そのコンピュータにはクオリアがないとは言えない。もちろん、あるということもできない。

\* 他人はクオリアをもつのか？

① 「ひとは他人がクオリアがあることをどうやって知るのか？」

② 「私は、他人がクオリアを持つことをどうやって知るのか？」

永井均ならば、①はすでに、他人がクオリアをもつことを前提している。しかし、それをどうやって知るのかが問題である。それを問うには、②の問い方が必要だ。このとき、他人がクオリアを持つかどうかは、不可知にとどまるだろう。

\* 私はクオリアを持つのか？

私が持つ「赤」のクオリアが、他人の「赤」のクオリアと同じであるかどうかを確認することはできない。それならば、私が持つクオリアが、他人のもつクオリアと（同じものではないとしても）同様のものであることも確認することはできない。私は他人と同じように、クオリアについて語りうるが、しかし、私が本当にクオリアを持っているのかどうかは、分からない。

\* このように考えるとき、そもそもクオリアというものが存在するのかどうか、わからない。

4 物理主義で志向性を説明できるか？

心的な出来事は、二種類に分けられる。

クオリア

志向性

(1) 志向性とはなにか。(サール『心の哲学』山本貴光、吉川浩満訳、朝日出版社より)  
志向状態とは、例えば、信念、欲求、希望、恐れ、知覚、記憶、意図、である。

志向性とは、このような状態の心の性質である。

志向状態には、自らを超えて世界の中の対象と事態を指し示す能力がある。

志向状態には、命題を内容とするもの

対象を指示するもの（たとえば、マリリンを愛する）

\*志向性 (intentionality) と内包性 (intensionality) は別のものである。内包性とは、外延性 (extensionality) に対立するもので、特定の文や言明その他の言語的な存在物が備える性質である。通常、文や言明の意味 meaning (指示対象 referent と区別されて) と呼ばれているものである。

(2) 志向性は、心の機能に還元できるように思われる。

そうだとすると、このような志向性を持っているかどうかは、チューリング・テストによって確認することができる。そしておそらく未来のコンピュータは、このような機能を持ち、チューリング・テストをパスするだろう。したがって、志向性の説明は、物理主義にとっては解決可能な課題であり、クオリアの説明の方が、困難な問題、ハードプロブレムだと考える者（チャルマーズ）がいる。（チャルマーズは、「自然主義的二元論」を主張する。参照、チャルマーズ著『意識する心』林一訳、白揚社）

もし志向性の中に機能に還元できない部分があるとすると、それはクオリアと呼ぶことができるだろう。

## 5、デイヴィドソン (Donald Davidson) の非法則的一元論

参考文献：デイヴィドソン著『行為と出来事』服部裕幸、柴田正良訳（勁草書房）第8章

(1) デイヴィドソンは、非法則論的一元論を主張する。

「非法則論的一元論」とは、次の三つの原理がともに成り立つと主張する立場である。

- ①「因果的相互作用の原理」＝「少なくともいくつかの心的出来事は物的出来事と因果的に相互作用し合う」（訳 263）例えば、「身体的運動」や「知覚」がそうである
- ②「因果性の法則論的(nomological)性格」＝「因果性が存在するところには法則が存在しなければならない」（訳 264）
- ③「心的なものの非法則性」＝「心的出来事を予測したり説明したりするための根拠となる厳格な決定論的法則は存在しない」（訳 264）

一見すると、これらの三つの原理を同時に受け入れることは、矛盾するように見える。例えば、①と②は矛盾しないように見えるが、それらは③と矛盾するように見える。しかし、デイヴィドソンは、<この三つの原理を認めても、矛盾しない>と主張する。

<用語の説明>

「出来事」＝再現不可能な、特定の時刻を割り当てられた個体」（訳 266）

「心的出来事」＝「心的用語によって記述可能である出来事」

「物的出来事」＝「純粹に物的な語によって記述可能である出来事」 267

<心的出来事と物的出来事の間に関する四つの理論>

法則論的一元論(nomological monism)：唯物論

法則論的二元論(nomological dualism)：心身平行説、心身相互作用説、随伴現象説

非法則論的二元論(anomalous dualism)：デカルト主義

非法則論的一元論(anomalous monism)：ファイグル、シューメイカー、テイラー、ナーゲル、ストローソン、

## 2、説明の矛盾

次の二つ

②「因果性の法則論的(nomological)性格」＝「因果性が存在するところには法則が存在しなければならない」

③「心的なものの非法則性」＝「心的出来事を予測したり説明したりするための根拠となる厳格な決定論的法則は存在しない」

からは、

④「厳格な心理・物理学的法則は存在しない」(287) (③の言い換え)

が帰結するだろう。

しかし、次の二つ

①「因果的相互作用の原理」＝「少なくともいくつかの心的出来事は物的出来事と因果的に相互作用し合う」

②「因果性の法則論的(nomological)性格」＝「因果性が存在するところには法則が存在しなければならない」

からは、

(④の否定)「心的出来事と物的出来事の間には、法則が存在しなければならない」

が帰結するだろう。

## 3、矛盾の解消

この矛盾は次のように考えるときに解消する。

(1)心的出来事と物的出来事は同一である。(①をさらによく考えてみよう)

③心的出来事は非法則的である。

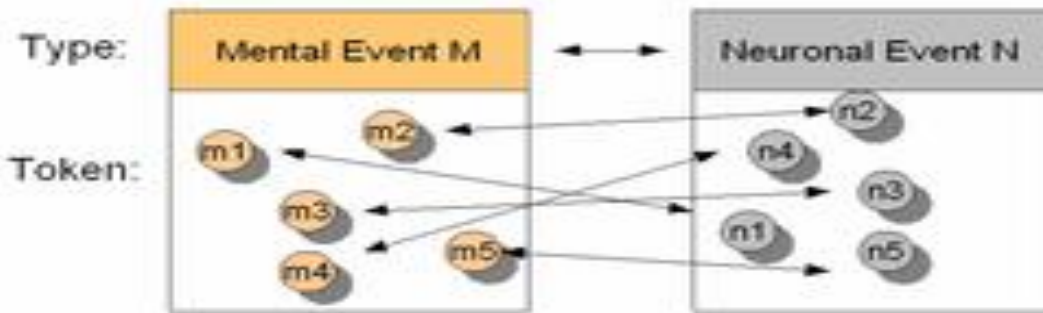
②物的出来事は法則的である

この3つを同時に成立しているとすれば、次が成り立つ。

(2)心的出来事と物的出来事はタイプ同一でなく、トークン同一である。

「ある心的出来事はある物的出来事と同一であると知りながらも、しかし、それがどの出来事であるかを(その出来事をしかるべき法則の下に包摂する一意的な物的記述を、その出来事に与えることが出来るという意味においては)知らないという場合があることがわかる。したがって世界の物的歴史を全て知り尽くし、しかも、あらゆる心的出来事が物的出来事と同一であるとしても、そのことから、唯一の心的出来事(もちろん、そのように記述されたものとしての心的出来事)さえも、それを予測あるいは説明しようということは帰結しないのである。」 290

### A) The Identity Theory: Type and Token



### B) Anomalous Monism: Token Without Type



古典的同一説と非法則的一元論の対比。同一説からすると、あるひとつの心のタイプを構成するすべてのトークンが、ひとつの物理的タイプを構成する物理的トークンのひとつひとつに対応（矢印で示している）している。一方、非法則的一元論によれば、タイプ間の対応関係にトークン間の対応関係は縛られない。残るのはトークンレベルの同一性だけである。（「心の哲学」Wikipediaより）